

歴史のif 幻の幕府

仮に、大蔵合戦の勝敗が逆転していたならば、その後の歴史はどう変わっていたでしょうか。

秩父一族と源氏の系図を見ると、その答えが見えてきます。大蔵合戦の翌年に勃発した保元の乱(14)では、源義朝・平清盛の味方した後白河天皇の勢力が勝利しました。その原動力は、大蔵合戦に勝利した源義平が率いて京都へ出陣した武蔵国、相模国を中心とする武士たちでした。

もし大蔵合戦の勝者が、義賢であつたならば、これら関東の武士たちを率いたのは義賢となり、その勝利は、義賢と為義の味方した崇徳上皇方の勢力となったはずです。

史実では、敗者の為義は、その子等(幼い子を含む9人の男子兄弟)とともに死罪となつてしまいましたが、これが逆転していれば、義朝と平清盛は死罪となり、その子頼朝も範頼、義経も死罪となつていたかもしれません。続く平治の乱以後の平家の天下も、後々の鎌倉幕府も存在しないこととなつてしまうのです。

仮に、この後武士の時代が到来し、幕府が開設されることが歴史の必然であるならば、その武都となるべき場所

は、鎌倉ではなく、秩父一族が補佐した義賢、義仲の本拠であるこの嵐山(大蔵、菅谷)こそふさわしいということになるのです。



大蔵から菅谷へ

畠山氏が秩父一族の家督に

大蔵合戦のときに、攻撃軍の武将の中に畠山重能がありました。重能は、秩父一族の家督を継ぐべき嫡流だったにもかかわらず、畠山を名乗り、傍系に甘んじなければならぬ境遇にありました。ひそかに一族の家督に返り咲く機会を窺っていたのかもしれない。重隆亡き後の秩父一族の家督は、畠山重能に引き継がれたと見られます。秩父一族の家督が本拠地とした嵐山町(菅谷)に、重能の子、重忠の館があることが根拠と言えます。

この菅谷館は、鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』には重忠の居館として登場

します。後に源頼朝が平家打倒の兵を挙げたとき、秩父一族を率いて参戦した重忠は、17歳の初陣であり、父重能が大番役として京にいたため代理的な立場でした。つまり菅谷館は、重能の構えた館だったと考えられます。

重能のあと秩父一族の家督を引き継ぎ総帥となった重忠は、数々の武功を立てました。しかし、頼朝亡き後、名実ともに実力者であり、御家人たちの信頼も厚かった重忠は、若い將軍の外戚として権力を一手に掌握しようとする北条氏にとっては目障りな存在となり、ついには謀略により滅ぼされてしまいました。

重忠公の功績とその人柄

畠山重忠は、鎌倉幕府に忠誠を尽くし、將軍頼朝の臨終に際しては、頼朝から直々に後事を託されたほどの信頼が寄せられていたということです。また『吾妻鏡』には100か所ほど重忠に関する記事が登場します。知勇兼備、清廉で誠実な人柄が、当時の人々に知れ渡る重忠の人物評価だったのでしょう。畠山の苗字を名乗りながらも「秩父殿」と呼ばれ、「鎌倉武士の鑑」と尊敬され、敬慕された重忠の生き様、存在感は、時代を超えて今なお健在です。

秩父一族の聖地「武蔵嵐山」

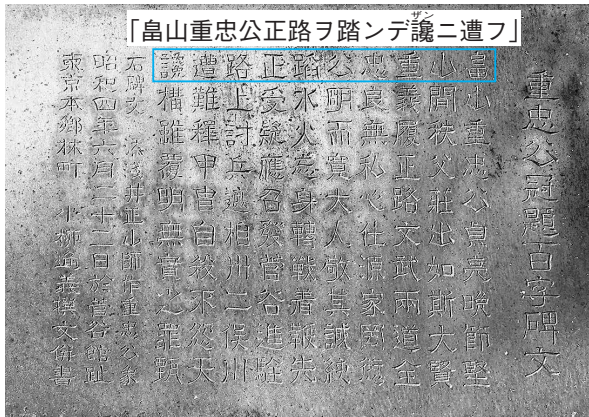
嵐山町は、秩父重綱から畠山重忠へと続く秩父氏の本拠地であり、大蔵館、菅谷館をはじめ、一族の安寧と繁栄を祈る浄土の世界を再現した平澤寺があるなど、まさに秩父一族の聖地と呼ぶべき土地であります。

800年余りを経た今日でも、重忠を敬慕し、地域の誇りとする気概は、今なお町民一人一人の心に深く生き続けています。

今から92年前の昭和3年(1928)、小柳通義という儒学者が重忠の人柄に惹かれてこの町を訪れました。翌年には地元の有志とともに菅谷館跡に重忠像を建立し、『冠題百字詩(9)』を傍らに刻みまし

た。

その重忠像除幕式のため、像にかけられた白い布をたまたま大平山の山頂から見止めた人がいました。質実剛健な地方武士の精神に学び、地方の自治を担う人材を養成しようとする学校を開校するための用地を探してい

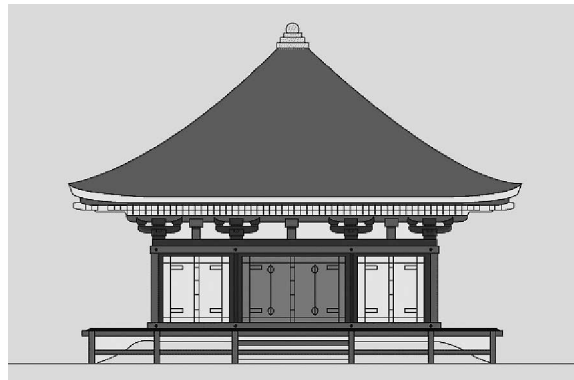


畠山重忠公冠題百字詩

(10文字×10行の100字詩 重忠公像の傍らにあります)

旧平澤寺は秩父一族の総氏寺

秩父一族の総帥としての重忠の実力は、嵐山町平沢にある旧平澤寺僧坊跡群の遺構とその規模が如実に示しています。



平澤寺四面堂の再現イラスト

たのです。そしてそれは昭和6年に安岡正篤が開いた日本農工学校となりました。安岡が理想とした地方武士こそ畠山重忠だったのです。今の菅谷館跡と国立女性教育会館の敷地を含む23ヘクタールにも及ぶ校地でした。時を同じくして、昭和3年にこの地に招かれた林学者本多静六によって「武蔵嵐山」が命名され、新聞に紹介されると、にわかに観光地として注目されることになり、昭和6年に嵐山溪谷に料亭旅館「松月楼」が開業し、昭和10年には東武東上線の「菅谷駅」が「武蔵嵐山駅」と改名するまでとなりました。

現在の町名「嵐山町」は、溪谷の紅葉を目にしたときの本多博士のつぶやき「これは武蔵嵐山だ」が由来となったものです。

このように、昭和の初め、この地が多くの学者や著名人などを呼び寄せ、一躍脚光を浴びることとなったのは、一つには畠山重忠の遺徳であったといえるでしょう。そこにはかつて秩父一族の聖地であったこととの不思議な宿縁のようなものが感じられます。

(文・植木 弘)

問合せ 教育委員会事務局

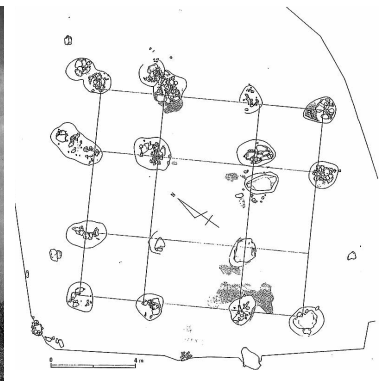
☎ 62-0824



11 平澤寺の再現イラスト(鎌倉時代)



13 旧平澤寺僧坊跡群 発掘された礎石建物(四面堂)跡



13の礎石配置図

14 木曾義仲・畠山重忠 年表			
西暦	年号	月	出来事
1148	久安4	2	秩父重綱が平沢に納経(鑄銅経筒)
1153	仁平3		源義賢が大蔵館に移り住む 義仲(駒王丸)、出生
1155	久寿2	8	大蔵合戦
1156	保元元	7	保元の乱
1159	平治元	12	平治の乱
1164	長寛2		重忠、武蔵国男衾畠山館で出生
1180	治承4	4	治承・寿永の乱(源平の戦い)
		10	重忠、秩父一族を率い頼朝に帰順。先陣を命じられる
1183	寿永2	8	義仲、京都に攻め上り、朝日將軍の称号を賜わる
1184	寿永3	1	義仲、近江の粟津で戦死
1185	文治元	11	頼朝、鎌倉幕府を開く
1205	元久2	6	重忠、二保川で戦死